

「相互理解」することの難しさ

阿部新

1. はじめに

ヒト・モノ・カネが自由に行き来するグローバリゼーションの時代が進んだことは、もはやその存在を疑うまでもなく、世界を席卷している。世界はかつてないほどに結び付けられ、一方で引き裂かれる流れにあって、「相互理解」が重要であると説かれて久しい。論者によって主張は異なるものの、最大公約数的にそれらの主張を要約すると、世界は多様で複雑であり、様々なヒトが暮らし、社会のありようも多様であり、それを理解することが重要なのだという。そして、それが人々に寛容や赦しの精神をもたらし、国民国家の衝突を和らげ、終局的には国際平和に奉仕するのだという。

あるテレビ番組では、シルクロードの奥深さが強調され、韓国の俳優が日本人から人気を博し、親近感を強める。また、ある一方では、国際交流プログラムなるものが、国レベルから地方の小さな町レベルまで企画され、小さいうちから外国を経験し、「相互理解」を深めるのだという。今夏、早稲田大学・ソウル大学・北京大学の3校が共同開催した、サマースクールもそうした活動の一環に含められる。

それ自体、否定されるべきものではない。むしろ、歓迎されるべきものである。しかしながら、一体何をどの程度理解すれば「相互理解」したといえるのか、そもそも「相互理解」が可能であるのか。多様で複雑でない国はあるのだろうか¹。「相互理解」という言葉が解かれる重要性に比して、適当な言葉遣いがまかり通っている。また、さらには、理解が深まり、関係が深化・拡大するにつれて、「摩擦」を引き起こすということも看過されがちである。筆者はそうした現状に批判的である。

そこで、小論では、サマースクールでの体験も踏まえつつ、第2章で「相互理解」の現状を検討し、続く第3章では「理解」と「摩擦」の関係を論じる。そして、最後に結語を述べる。

¹ 同様の問題意識として、山影（1994）、283頁

2. 相互理解の現状

前述したように、「相互理解」の重要性はグローバリゼーションの高まりとともに説かれるようになっており、政治・経済をはじめ文化に至るまで、「相互理解」を実現しようとする試み、ないし枠組は無数に存在する。地方の国際交流プログラム、財界のミッション派遣など実際に海外に触れることから、テレビやインターネットのメディアから、あるいは学問を通じて間接に海外に触れることまで、「相互理解」のための装置は様々に用意されている。

それらを一言で要約すれば、「われわれ」とは異なる何者かの一端に触れ、何かしらの知識や経験を得ること、そしてステレオタイプの差異を確認して安心するのが「相互理解」のようである。そこでは、好奇のまなざしで、「われわれ」と違うものを見つけ出すことが強調される。

しかし、理解にはそうした差異の発見という側面を認めざるを得ないとしても、それでは何をどれほど理解すれば、果たして「相互理解」したと言えるのかということは明らかでない。確かに、海外に行くことで、あるいは書籍を読むことで、韓国の政治、中国の経済、日本の文化などの一端に触れることはできる。そして、ここは「われわれ」と同じであると安心をしたり、そこは「われわれ」と違うと驚いたりする。例えば、日本で見た半跏思惟像の微笑を韓国でも見たとき、日本と韓国の文化の近さを感じたり、ある小説の主人公に中国と韓国の学生が共感を覚え、親近感を感じたりする。反対に、テレビで歴史の「記憶」の違いに触れたとき、彼我の遠さを感じるといった具合に、である。

以上は、相手を理解する、ということであったが、そもそも日本人が日本を理解することも難しい。簡潔の美を尊ぶ茶道の高雅な精神²を学んだところで、「ふるさと」に歌われるような原風景に接したところで、歴代の首相を諳んじることができたところで、ポップカルチャーをよく知っていたところで、果たして日本を理解していると言えるのだろうか。それでは、通常の日本人より日本事情に明るい中国人学生は一体何者であることになるのだろうか。

このように、相手を理解しようと試みるのであれば、自らが何人（なにじん）であるかはもちろん、何人（なんびと）であるかという難問につき当たる。「何人（なにじん）」であるかは、多くの場合国籍から明らかであるが、「何人（なんびと）」かは、当人にとっても容易に知り得るものでもないし、多元的なアイデンティティの中で生きていくうちに変わりうるものでもある。

とすると「理解」という言葉には、この種の「いいかげんさ」ないし「胡散臭さ」がつきまとう。互いがある程度互いに対する知識が増え、皮肉めいていえば、「なんとなくわかったつもり」の関係に入る。少なくとも「あいつら」と考えるのを止める、という時点で「相互理解」が完成

² 岡倉覚三『茶の本』（岩波書店、1929年）

したと思いきや。そこでは、理解が進むほど摩擦の可能性が増加する（この点については第3章で検討する）ことや「自／他」の微妙な境界があることにそれほど関心が払われていない。

そうしたことからすると、「相互理解」とは、完結された状態でも目指すべき頂点でもなく、常に他者を知ろうとするプロセス、常に流動する、ともすれば把握することが困難な「自／他」の境界の中で闘ぎ合う動的なものともみべきなのではないか、というのが筆者の暫定的な結論である。何かを「理解」したと満足してしまうことは、そうした営みからの脱落に他ならない。

3. 「理解」と「摩擦」のジレンマ

第2章では、相手を理解するとはどのような営みであるのかについて検討した。それでは、相手を理解すべく、理解の「質」・「量」を拡大させていくと、「摩擦」という次の問題が発生する。「摩擦」とは、異質なものが接触するときに、生じる緊張や軋轢をさす。ここで、山影進の論考を引用する。

摩擦は回避できるものでもなく、また、誰かの陰謀によって生じるものでもなく、相互依存状況下では摩擦の発生は必然的であるという認識から出発する。つまり、従来より接触の機会が増え、交流量が増え、国際交流に関与する人々が増えるにしたがって、摩擦は増える。（中略）われわれは、摩擦を回避しようとし、安易に調和を求めるのではなく、相互依存深化・国際化に伴う摩擦を正面から見据えなければならない³。

注目すべきは、交流の拡大の中で摩擦は必然のものという点はむろん、摩擦が「誰かの陰謀によって生じるものでもなく」という部分である。「誰かの陰謀」によらない、というのが「摩擦」を考える上で興味深い。あるサマースクールのできごとを取り上げてみたい。

3週間のプログラムのうち、すでに2週目に入り、メンバーが「なんとなく」打ち解けてきた頃である。互いの歴史をどう編むか、共通の記憶が本当に可能なのかという議論が行われたときのことである。筆者ら（日本人）には、中国・韓国側からそれまでの和やかさとは何かちぐはぐした、鋭い口調での意見が投げかけられた。

「日本人は謝罪すべきだ」

「日本人の意見（*your opinion*）を聞きたい」

³ 山影編（1988）、3頁

それまでの単数の *you* は、日本人という一括りの *you* となり、同輩で話し合っていた議論の場が、「中国・韓国」対「日本」の議論となってしまった。見ず知らずの者同士の話題であればいざしらず、打ち解けてきたはずのメンバーに、突如として一括りの *you* と扱われたことは、大げさにいえば衝撃的であった。

もちろん、筆者は、歴史問題に正面から取り組むことから逃れることを主張したいのではない。交流が拡大し、互いに対する「理解」が広まる中で、なされた発言が微妙な「摩擦」、関係のよそよそしさを招いたことは注目に値する、ということを示したいがためこの例を取り上げた。個人の発言が、いつの間にか国家の見解を代弁する。そして、その見解の違いが「なんとなく」打ち解けてきた間柄に、気まずい雰囲気が流れる。そのような思いがけない体験があった。

むしろそれらの発言は、それまでに彼ないし彼女が教わってきたことを率直に述べたにすぎず、ましてや「われわれ」の関係を破壊しようと意図したものではない。この微妙な関係のよそよそしさは、山影の言葉を改めて借りれば、(彼女の)「陰謀によって生じるもので」はなかった。ところが、彼女の発言は直ちに彼我の違い—「韓国」と「日本」／「中国」と「日本」—を意識させ、その境界には埋めがたい裂け目を感じさせるのには十分であった。(改めて別の場で話し合うことで、これらの「摩擦」は一応収まり、事後の関係には影響がなかったが。念のため。)

ポップカルチャーや「アキハバラ」などに代表される日本の文化(これを「文化」と含めてよいかは争いがあるが)やその成果物、さらには顔の見える生活者としての相手には共感を覚える。しかしながら、ひとたび、問題が「国」民としてのアイデンティティに関わる事項になると、とたんに目の前の相手は顔を失い、「中国人」・「韓国人」に矮小化されてしまう。面従腹背などと悲観的な表現は用いないにしても、一見良好に見えた「われわれ」の関係が、実は意外にもある側面では非常に脆弱なものであることに気づかされる。ある種の友好的な信頼関係が生まれてきた中で、ひとたびこのような「摩擦」が生じれば、友好が途端に(一時であるにせよ)相手に対する嫌悪に転化しかねない。まして、今回の筆者の体験は、意図された結果でないからこそ、厄介なのである。

4. 結びにかえて

以上、本稿では、論説というよりも、恣意的な言説の域を得ないという憾みがあるものの、本スクールを通して感じた「『相互理解』することの難しさ」を筆者なりに論じることを試みた。

すでに述べたように、「われわれ」とは異なる何者かの一端に触れ、何かしらの知識や経験を得ること、ステレオタイプの差異を確認することをもって、あるいは、「摩擦」のない一見良

好な人間関係をもって「相互理解」が成ったというのは容易である。より具体的には、日本人が韓国の歴史の一端を、中国人が日本のポップカルチャーの一端を知ったところで、「相互理解」ができたとするのはあまりにもナイーブにすぎる。他にも、他者を理解するには、まず自らをどのように理解するのか、また、何をどの程度知れば果たして「理解」したと言えるのかといういささか厄介な問題が常につきまとう。

そうしたことからすると、筆者の見解は、「理解」とは完結された状態でも目指すべき頂点でもなく、常に他者を知ろうと不断の努力を続けるプロセスであるという見方にたどり着く。他者（例えば日中韓）との間にはむしろ埋めがたいギャップが存在するが、さしあたってはそれを正邪の争いにはしない。自らを絶対的なものとするのではなく、常に相対的な契機をとりこむ。仮に、「摩擦」が生じることがあっても、顔の見えない抽象的な「日本人」・「中国人」の間で摩擦が行われるのではなく、日々のやり取りを通じた顔の見える者同士での「摩擦」、次いで摩擦からの回復を体験することが重要である。

そして、それを乗り越えてさらなる「理解」を続けるのであれば、1国の論理には必ずしも吸収されないような言説、別の表現を用いるならば、佐々木毅らが提唱するような「東アジアにおける公共知」⁴を創出することに1つの解があると考えられる。日中韓は、地理的に近接しており、かつては中華秩序・漢字圏に属していたことから文化的にも近接性を有しているとみられがちである。ところが、三者の間には、経済の相互互惠の論理ではおよそ解消され得ないような考え方やコミュニケーションの隔絶が存在する。

例えば、言語を取り上げてみる。ハングルは中国語と「相通じない」⁵ものとされ、反対にハングルに慣れた世代は、漢字で書かれた表記を理解することはできない。また、多くの日本人は、簡体字で書かれた中国語を理解できるようでできないことに気づかされる。このことからしても「われわれ」と日中韓を括るには、言説・言語・記憶といった認識のレベルでも、実際の関係という実体のレベルでも、いまだに多くの点で困難である。そして、そうした困難さを解消できるような「装置」は文化面など極めて限られた領域でしか機能していない。ポップカルチャーを通じて若者が「相通じる」ことは可能であっても、こと、例えば戦争の記憶のようなものに及べば、若者同士であったとしても「相通じない」（もちろんこれ自体ステレオタイプに陥った議論であるとの誇りを免れないが）。

その意味で、本スクールのような取り組みが積層し、必ずしも一国民国家には吸収され得ない言説が醸成されることで、将来において真の意味での日中韓の関係改善になることを期待する。

⁴ 佐々木他編（2003）

⁵ 『訓民正音』中の、世宗序「國（韓国のこと一筆者）之語音，異乎中國，與文字不相流通，故愚民，有所欲言，而終不得伸其情者多矣。予為此憫然，新制二十八字，欲使人人易習，便於日用耳。」を参照。

参考文献

衛藤瀋吉編『日本をめぐる文化摩擦』（弘文堂，1980年）

衛藤瀋吉他著『国際関係論 第2版』（東京大学出版会，1989年）

岡倉覚三『茶の本』（岩波書店，1929年）

佐々木毅他編『東アジアにおける公共知の創出 過去・現在・未来』（東京大学出版会，2003年）

高橋哲哉『歴史／修正主義』（岩波書店，2001年）

藤原帰一『戦争を記憶する 広島・ホロコーストと現在』（岩波書店，2001年）

山影進編『相互依存時代の国際摩擦』（東京大学出版会，1988年）

山影進『対立と共存の国際理論－国民国家体系のゆくえ』（東京大学出版会，1994年）